



こんにちは!

気象庁です!

6月号
平成22年
(2010年)



7月の気象

～日本の夏の天候を左右する
太平洋高気圧とオホーツク海高気圧～

7月は、本州付近では、梅雨が明け、盛夏期を迎える時期です。この時期の日本の天候を左右する高気圧として、太平洋高気圧とオホーツク海高気圧があります。

太平洋高気圧

太平洋の亜熱帯域を広く覆う高気圧で、中心はハワイ諸島の北の太平洋東部にあります。一年を通して存在し、夏にその勢力が最も強くなります。太平洋高気圧のうち、日本の南海上まで張り出した部分を小笠原高気圧という場合もあります。太平洋高気圧の日本列島への張り出しが強い(図1)と暑夏となり、反対に張り出しが弱いと冷夏となります。一般に、太平洋高気圧は7月に本州付近への張り出しを強め、それに伴って梅雨前線が北上し梅雨明けとなります。

また、太平洋高気圧の西縁部に沿って、南から暖かく湿った空気が流入するため、この高気圧は梅雨前線の維持・強化にも影響します。

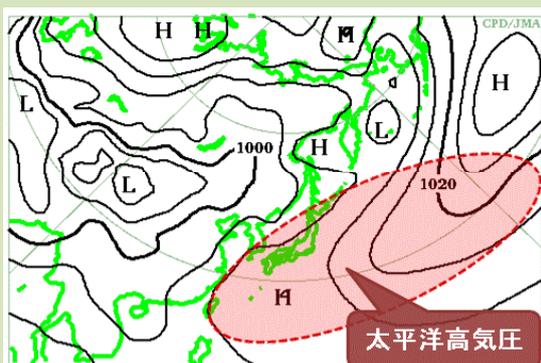


図1 太平洋高気圧が日本列島に張り出し、暑夏となった例(2000年7月中旬)

等値線は海面気圧を表し、間隔は4hPaです。この期間、太平洋高気圧の本州付近への張り出しが次第に強まり、東・西日本の各地で梅雨明けとなりました。気温は北～西日本で平年より高くなりました。

オホーツク海高気圧

オホーツク海や千島付近で勢力を強める高気圧で、梅雨期に多く現れます。オホーツク海高気圧が形成・停滞すると、冷たく湿った北東気流(やませ)が北日本の太平洋側に流れ込み、低温・日照不足を引き起こし、農作物に大きな影響を及ぼすことがあります。オホーツク海高気圧は春から夏にかけて常に形成されている高気圧ではなく、頻繁に発生する年もあれば、反対にほとんど現れない年もあります。オホーツク海高気圧が優勢だった2003年7月(図2)は、低温・日照不足が顕著となり、水稲や野菜等に大きな被害が発生しました。



図2 オホーツク海高気圧の勢力が強く、北日本、東日本で冷夏となった例(2003年7月中旬)

等値線は海面気圧を表し、間隔は4hPaです。この期間、オホーツク海高気圧の勢力が強く、また、太平洋高気圧の本州付近への張り出しが弱かったため、北～西日本では気温は平年よりかなり低くなりました。また、この7月は月を通してオホーツク海高気圧の勢力が強く、北日本の太平洋側と東日本の太平洋側・日本海側では、月間の日照時間が1946年以降でもっとも少なくなりました。この年の梅雨明けは東・西日本で平年より10日程度遅く、東北では特定できませんでした。